



1



2

1 遺跡内には特徴的な平たい巨岩が点在する。ほかにあずまやや池もあり、桜の木が周りを囲む現在の様子は、庭園のようである 2 平成18年の調査で産地が特定された巨石。くさび穴と思われる痕跡が残るものもある。これらの石は東稲山から運ばれ、北上川を横断して対岸のこの地に來たのだろう

奥州遺産

― ときを越え 受け継がれるもの ―

第91回

室の樹遺跡

Ⅱ 衣川室の木Ⅱ

桜の季節、長者ヶ原廃寺跡より東を眺めると桜に囲まれた広場が見える。そこが室の樹遺跡だ。室の樹の名は、平泉の藤原氏が全盛のころに秀衡の母が、京都の御室より庭木をここに移植して庭園を築いたという伝承に由来する。御室とは仁和寺の異称である。遺跡内には、建物の礎石にも見える巨石が点在する。昭和47年の発掘調査では遺構は見つからず、これらの巨石は衣川の氾濫により自然に運ばれたものと思われた。しかしその後の石材調査の結果、奥羽山系に存在しない東稲山から産出される石材であることが分かり、人の手によって運ばれてきたことが明らかとなった。

これらの巨石には、長者ヶ原廃寺跡の礎石と同じ石材があるため、この地は石材の加工場だったとする説がある。また、瓦が出土したという証言もあり、建物があつた可能性も否定できない。

広 告